ハーバーマスによるロールズ再批判の考察

—政治的なものと哲学的なもの—

An Examination of the Second Debate between Rawls and Habermas : The Political versus the Philosophical

板 橋 亮 平
ITABASHI Ryohei

The purpose of this paper is to focus on the relationship between the political sphere and the philosophical one by examining the second debate between Rawls and Habermas. Whether the political conceptions in democratic regimes can be justified from the philosophical standpoint of impartiality or from the standpoint of citizens whose shared public values are reasonable depends on what kind of method the observers adopt.

Clarifying the notion of the citizen, the person, and the observer as they occur in Rawls, I indicate that the concept of “impartiality” Habermas considers valid requires the citizens adopt the observer's perspective. Hence I conclude Habermas' method is too rigoristic.

1. 問題の所在

ハーバーマスは、1995年に「理性の公共的使用を通じた宥和：ジョン・ロールズの政治的自由主義にかんする所見」という論文（Habermas 1995）で、討議倫理学の立場から主にロールズの「原初状態」、「自律性」、「手続き的・実質的正義」といった諸概念についての批判的考察を試みた。原初状態論では、立憲体制に特徴的な「私的自律性」ばかりが強調され、ハーバーマスが良しとする「公的自律性」が確保されないと批判する。それに対してロールズも黙ってはおらず反論を展開し、かかる2つの自律性はロールズ理論のなかでは相反するものではなく、むしろ相補的なのだときりかえした（Rawls 2000 以下「RH」）。私は、以上のハーバーマスとロールズの初期論争についての分析とその意義について、既に論文として発表し（拙稿 2002）、結論として道理性と真理性の融和、公的自律性と私的自律性との同居といった、自然権論的でも共同体論的でもない新しい親和的公共性について論じた。しかし上の私の論文では、ハーバーマスのロールズに対するさらなる再批判論文「道理性と真理性」（Habermas 1998 以下「RT」）についての検討は行うことができなかった。この再批判論文は当初の法哲学的な視点（権利や手続きなど）による批判論文とは趣を異にしており、正義justiceの「政治的構想」political conceptionの公共的な正当化について政治哲学上の議論をハーバーマスは展開している。とりわけ「不偏性」といった観点を、公共的な正当化にかんする合理的な基準としてハーバーマスは主張している。この点は新しい論点である。確かに、impartialという用語については、ロールズ理論のカント的なモノローグ的フレームワークを論難するという文脈で言及はされているが、公共的正当化の合理的基準として言及されてはいないし、むしろ否定的な含意をもたせている。その代わりにtruthやobjectivityという用語を多く使用し、討議倫理学による公共圏の確立を主張している（Habermas 1995:123-126）。

本稿では「政治的構想」の公共的正当化をめぐる、「不偏性」概念にかんするロールズとハーバーマスのスタンスの差異を確定する⁽¹⁾。わけても、かかる両者の間に存在する不偏性の概念についての溝は、現代リベラリズム論争、すなわち、善や価値に依拠せずにそれらの対立する現実を反映した多元性を確保する形で、中立的に正当化される「ロールズ＝政治的リベラリズム」と、それとは対照的に善や価値とは何かについての哲学的な問いを公共的構想の中心に置き、もって公共的正当性を原理的な基礎に求めるべく意図されている「哲学的リベラリズム」との近時の論争に端を発している⁽²⁾。ここでハーバーマスのロールズに対する批判を、かかる「内在的＝哲学的リベラリズム」からの「政治的リベラリズム」への批判として受け取ることは、微妙にミスリーディングである。なるほど、ハーバーマスは哲学的な基盤に基づく公共圏の確立・正当化を目論んではいるが、この目論みは、討議による不偏的構想によって達成される。そのさいの「不偏性」とは、さまざまな価値や善の内在的論理を重ね合わせていった結果として出現してくるような妥協的な「内在的＝哲学的リベラリズム」ではない。むしろさまざまな価値や善が、1つの不偏的な哲学的視点のもとに包摂され、収斂し、もって公共的正当化をなそうとする「討議的＝哲学的リベラリズム」である。誤解を恐れずにいえば、かかるハーバーマスのリベラリズムは、プラトンのようなアイデアの発想に近いようにおもえる。

ロールズとハーバーマスの後期論争の意義は、通常の「政治的リベラリズム」と「内在的＝哲学的リベラリズム」論争つまり相対主義か普遍主義かの論争ではなく、「政治的リベラリズム」と「討議的＝哲学的リベラリズム」の論争として捉えるところに、存在するとみなすべきである。そしてロールズが考える「不偏性」は、米国に代表される公共的価値の「普遍性」を道理的な形で正当化することによって確定され⁽³⁾、もって政治的構想の中心に据える。対してハーバーマスの「不偏性」は、上で見た如き超越的・外在的な形で正当化される構想の焦点を正す。ハーバーマスは、ロールズの構想正当化の論法が「内在的＝哲学的リベラリズム」的であることを批判し、かかる論法に代えて、「討議的＝哲学的リベラリズム」を提唱する。本稿はかようなハーバーマスの理解の妥当性を検証し、ロールズの「政治的リベラリズム」が「内在的＝哲学的リベラリズム」とは異なることを論証する。さらに、立憲体制を特徴付ける道理的な秩序構想のもとでは、ハーバーマスの正義の構想が、極めて困難であることを主張する⁽⁴⁾。

2. ハーバーマスのカント論

ハーバーマスは、「RT」の最初の3節にわたりロールズ理論におけるカント的構造の踏襲と逸脱について詳細な検討を試みている。ここではまず、ハーバーマスのカント解釈を紹介することからはじめたい。まずハーバーマスによれば、ロールズは「近代の条件」の特徴を見据え、道徳的リアリズムや近代懐疑主義を拒否しつつ、「多元主義」pluralismの事実のもとでの「政治的な本質的要素」についての合意、すなわち「包括的教義」comprehensive doctrinesとは無関係に認められる、全ての「市民」citizensに対する「平等な自由」equal freedomを与える合意の達成可能性について探求した(RT:78-79)。さまざまな包括的教義(宗教・形而上学)を所有する市民の間での「立憲的合意」が具体化されるのは、十分に中立的な「正義の構想」であり、これを発展させるロールズのアプローチは「構成主義的」constructivisticなのだ(RT:79)。ところが、とハーバーマスは述べる。伝統

的社会では、事情が異なっている。伝統的社会では「道德性」は、公共的受容を要求する世界観（包括的教義）の統合要素であった。道德的規範や原理といったものは、事物の合理的秩序の要素として考えられ、「真理性」の主張を表現する言明としてみなす、实在論的な説明がなされていた。しかし経験科学の認識論的な權威の興隆とともに、規範的言明は、記述的言明、価値判断そして表出的発話からより厳密に區別され、客観的理性が主観的理性にとって変わられたとハーバーマスは指摘する（RT:79）。そこでかかる道德学説の移行によって、規範的言明はそれでもなお認識論的な内容を持つのかどうか、そして持つとするならばいかなる形で規範的言明は正当化されるのか、かかる問題はロールズのみならずハーバーマス自身にとっても難しい問題だとハーバーマスは述べる（RT:79）。

ハーバーマスは、道德の客観性を道具性ではなく実践理性に基づかせることを主張する⁽⁵⁾。カント的伝統において実践理性というものは、道德的規範や原理が不偏的な形で判断される視点を提供し、それを「定言命法」とよぶ。こうした手続きが道德的観点を構成し、ロールズの原初状態の構築もかかる手続きの1つであり、参加者participantsの合理的選択に適切な制約を課すのである。定言命法にせよ原初状態にせよそれら手続きは、全ての人の「平等な尊重」と「相互の結束」にかかわる、我々の直観を満たす合意をもたらしことができる。「こうして選択された原理や規範は普遍的認識を主張するから、手続き的に正しい合意は認識論的な意味で合理的に動機付けられなければならない」（RT:81）。その動機付けとは、ホププズの道具的動機付けではなく、議論、実践討議において間主観的に認識される価値や妥当する規範の意味論的内容といった一般化可能性をもった価値に対する指向である。それには条件が2つ付帯される。メンバーが、①十分な理由をもち、②同様な状況である、という条件（RT:81）⁽⁶⁾。ハーバーマスは、かかるカントの普遍化可能性テストにおける認識論の議論を避けようとする戦略（回避avoidanceの戦略）をロールズが採用していることを指摘し、当初『正義論』においてとられていたカント的な道德的視点、つまり道德的人格の2つの能力⁽⁷⁾を原初状態に課すことを、『政治的自由主義』（以下PL）においては放棄したと主張する（RT:82）。ハーバーマスによれば、『PL』において実践理性はすっかりと道德的視点をもぎ取られ、道德的真理に依拠する道理性に格下げされた（RT:82-83）。正義の構想の道德的妥当性は、普遍的に拘束する実践理性ではなく包括的教義の道德的要素が十分な程度に重なりといった、道徳的な世界観の幸運な収斂に基礎を持つのだと言う（RT:82）。以上のような理解のもとに、以後ハーバーマスは、「政治的正義の道理性」と「世界観の真理性」との分断について述べ、さらに実践理性を世界観の道德性よりも上位に置くというロールズの一貫性のないやり方を、批判する。

3. 重合的合意⁽⁸⁾は内在的か道徳的か

さて、ここからハーバーマスによる「ロールズ斬り」を見ていくことにしよう。ハーバーマスは、ロールズの「RH」における記述を引用することから批判のスタートを切る。「重合的合意が起こるのは、『政治社会の道徳的なメンバー全員が、彼らの包括的教義のなかに共有化された政治的構想を埋め込むことによって、その構想の正当化を成し遂げるときである』（Rawls 2000: 517）」（RT:83）⁽⁹⁾。しかし以後ハーバーマスは、重合的合意に至るまでのプロセスは、まったく公的な視点を欠落させているとしてロールズ批判を展開していく。

ハーバーマスは、ロールズの重合的合意が諸教義の「非公共的理由」によって成立すると規定する⁽¹⁰⁾。かかる理由は等しく諸教義に「内在」する視点であり、それらはハーバーマスによれば、「道徳的理由」であり「道徳的視点」であり、そして「信仰者のbeliever's視点」である(RT:84)。このように道徳性を宗教性、信仰性ないしは哲学のレベルに定めておいた上でロールズは、そのなかから出現してくる重合的合意を「理性の公共的使用」public use of reasonの基礎にしようとしている、とハーバーマスは言う。しかしハーバーマスによれば、事実とは逆で「ロールズが理性の公共的使用とよぶものは、基礎的諸原理にかんする既に達成された政治的合意の共有化された基盤platformを前提としているのだ。市民は、彼らの異なる背景的確信background convictionsにおいて出現してくる重なりの結果として…この基盤を利用できるのだ」(RT:84 傍点執筆者)。つまり逆に言えば、重合的合意が達成されるには何らの公共的な基盤を前提としないということになる。達成するための材料は、道徳的理由や背景的確信で良い。

誤解を恐れずハーバーマスの記述を解釈すれば、公共的基礎を持たずにたまたま出現してくる重合的合意が、共有化されている所与のアメリカ的な公共的・政治的構想とたまたま一致したとすれば、その時にのみ市民による理性の公共的使用は、この構想によって可能となる。有体に言えば、教義や善を持つ「人々」(あえて「市民」とは呼ばないでこう)が、「重合的合意」という契機・媒介を利用することに失敗し、所与のアメリカ的な政治的構想を引きうけないとすれば、それは公共的理性の失敗としてみなされるとロールズは考えており、かかるロールズの論法には、ハーバーマスは同調できないと言うのであろう。ここでハーバーマスは、ロールズの「重合的合意」を実行する人格を「市民」とはみなしていない。あらかじめ諸教義や善の中に公共的理性が備わっているならば、それは重合的合意が既に達成されていることを意味し、そのような人格をもってロールズは「市民」と規定している。重合的合意が実行・達成される以前は、政治的自由主義における公共性空間から排除される善や価値を持った単なる「人格」として、ハーバーマスはロールズ理論を把握している。「重合的合意が確立する前には、市民が内在的に普遍的判断を下しうる公共的な、間主観的に共有化された視点といったものは存在しない」(RT:84)。この主張を裏付けようとしてハーバーマスは、ロールズの「RH」から引用し「RT」84ページで記述する。「道理的な重合的合意が存在する時にのみ、政治社会の正義の政治的構想は…公共的に正当化されるのだ」(RT:84[RH:518])。

しかしながらかかるハーバーマスの解釈は正しいのだろうか。ハーバーマスによる重合的合意についてのハーバーマスの把握の仕方を、教義・哲学の内在的論理から支持される〈内在説〉と呼ぶことにしよう(「内在的=哲学的リベラリズム」)。つまり重合的合意には公共的基礎が欠落しており、全ては諸々の道徳的真理に由来するとみなす把握である。確かに上のようなハーバーマスが引用したロールズの記述を見れば、公共性は非公共的=道徳的な領域圏から出現してくるかのような印象を持ちうる。しかしながらロールズ理論においては、重合的合意は、公共的基礎をその中に含有する。ロールズは、単なる重合的合意ではなく、「道理的な」重合的合意という具合に、「道理的」という形容詞をつけている。ロールズにおいては、道理性は合理性よりも優先する構想であり、原初状態に位置する「人格」の持つ2つの能力の1つである「正義の感覚」と不可分である。ロールズにおいては、「道理的」とは公正としての正義を特徴付ける基本的概念であり、それは善ないし

教義よりも高いレベルに位置する⁽¹¹⁾。自由かつ平等という構想は道理性を持ち、この制約条件の中で合理的選択が説明されるとロールズは言うのだから、善や教義（の内在的論理）から重合的合意が創発してくるとのハーバーマスの批判（内在説）はやや問題がある。また、ハーバーマスは次のロールズの記述も見落としている。「…政治的構想は独立的 free-standingであるのだがそのことは、政治的構想が、市民の確証する異なる教義の中にさまざまな方法で埋めこまれえない、ということの意味しない」（RH:517）。かかる私の引用に対してハーバーマスは、「政治的構想」と「重合的合意」とは、異なる別の構想なのだ、と言うかもしれないが、そんなことはない。ロールズは、重合的合意は政治的構想に関する重合的合意だ述べている。「…私（ロールズ）は、…それ（政治的構想に関する重合的合意）は、我々に有効な社会的統一の最も道理的な基礎にとって十分なのだ」（PL:149）。ロールズによれば社会的統一は、その安定性が偶発的な事柄によって左右されないとして、重合的合意を「暫定協約」modus vivendiではないと規定する（PL:147）。しかしハーバーマスの＜内在説＞に近いと一見思われるロールズの記述もあるにはある。例えば「…政治的構想は、…さまざまな道理的な包括的教義によって支持される」（PL:145）や「市民は、彼らの包括的教義の枠内で…、正義の政治的構想を真か道理的なものであるとみなす」（PL:151）といった記述である。しかし「支持される」や「枠内で」といったロールズの表現は、ハーバーマスの批判の如く、正義の政治的構想が諸教義の内在するロジックから導出されるということの意味するわけではない。つまり「…政治的構想は、包括的教義の部分としてみなされうるが、しかし教義の非政治的価値の結果ではないのだ」（PL:155）。ロールズの『正義論』における原初状態のモノローグ的性格に対するハーバーマスの初期批判と同じ形で、政治的構想におけるロールズの重合的合意の帰結の属性たる内在性、モノローグ性、非公共性、非政治性を、ハーバーマスは批判するのだが、かかるハーバーマスの理解や批判は、ロールズの記述を見る限り妥当だとは到底思われない。

4. 討議的＝哲学的リベラリズム

ハーバーマスは、およそ合意とよべるもので公共性が確保されるものは議論によって妥当性を獲得しえたものだけだと言う。つまり公共性は、単なる道徳的・包括的な教義によってだけでは獲得されないし、だからと言ってロールズが言うような形で「彼ら(市民)の宗教的・哲学的なコミットメントを批判したり拒否することなく」（RH:519）正義の構想についての重合的合意が出現したとしても、それでは公共性を確保することにはならない、と言う。道徳・形而上学は真理を追いつめ非公共的である。これらが重なり合って公共性が確保できるのか、とハーバーマスは言う（RT:86）。そこでハーバーマスは、妥当性を持つものだけが公共的正当化を実行できるとして「妥当言明は、同一理由で全ての人々の受容acceptanceに値する」（RT:86）。「…議論の参加者は、…同一理由で合理的に動機付けられた同意に達することができる。そのような正当化の実践は、協同で公共的に達成された合意に依存する」（RT:86）。またかかる実践は、「妥当性要求、間主観的な認識を必要とするし、そして妥当性要求は、公共的正当化の見とおしを提供する」（RT: 86）。

ここまでのハーバーマスの主張はよく理解できる。単なる重なり合いではいけない、共同の討議が公共性の礎となり、それが受容の根拠ともなるのだと。しかも話し合っていればいつかはみんなが同じ理由に近づいて、ロールズの政治的構想は本物の「公共的」構想

となる、このようなロジックだ。「…彼ら（参加者）が立憲的基礎と正義の基礎的構想に焦点を当てればあてるほど、それらは道徳的討議に似てくる」（RT:87）。つまりハーバーマスのよれば、非公共的理由を持つ教義をたんに重ねるだけでは駄目で、しっかりと討議を行いつつ「その非公共的性質が相互に認識され」、「第3者の視点」へと収斂し「意見と政治的意志の政治的形成」をもたらす（RT:87）。「…市民や世界観の道理性だけでは、政治的正義の基本的問題が共同かつ公共的に議論するさいの視点を採用することを決して要求はしない」（RT:88）。つまり討議の中で「妥当性」という基準に即して世界観を収斂させることができるのであって、討議をしないロールズの重なり合いでは全く客観性や妥当性を確保し得ず、公共的な受容を導くことは無理である、とハーバーマスは批判する。どうやらハーバーマスの論法では、ロールズが良しとする多元主義が存在しない、同質的な社会を目指そうとしているかのようである。

つまり善の多元性は、妥当性要求によって収斂してしまうかのようである。かかるハーバーマスの論証は、説得的な面もあるが①ロールズは討議を全く無視しているのか、②妥当性が公共性を導くというのが、討議において全ての教義的内容の中にまで踏み込むことによって公共性を確保できるのか、この2点が問題点として浮上してくる。まず①の点について。ロールズはすでに『正義論』において審議の有用性について記述している⁽¹²⁾。正義の政治的構想は、元来不偏の自由で平等な人格が無知のヴェールをかぶせられた原初状態から導出される正義の諸原理を、政治的公共的に承認するところに成立するものである。そのさい諸教義がそれぞれの視点によって、ハーバーマスの言葉で言えば市民としてではなく包括的道徳的教義を所有する「市民自身の視点によって」（RT:88）は公共的な承認がいつになるかわからない。正義の諸原理が市民に対してある超越的な地位として討議の対象となり、ロールズが言う一般的で広い「反照的均衡」⁽¹³⁾の方法によって正義の政治的構想は実現されるのである。「…共有化された政治的構想は共通の基盤であり、…すべての道理性的な市民は、彼らのいくつかの道理性的な包括的教義を基礎として政治的構想を確証するさいに、一般的かつ広い反照的均衡に存在している」（RH:518 傍点執筆者）。ここで「基礎として」という記述を＜内在説＞と受け取ってはならないことは以前に見た通りである。それ以上に重要なことは、正義の政治的構想と包括的教義や市民の確信とが反照的均衡にある時は、いくつかの収斂された諸教義があるだけで、全ての教義が均衡にあるとはロールズが言っていないことである。つまりハーバーマスの主張とは反対に、ロールズの政治的構想は討議を経ないものであるどころか、討議を経ていくつかの諸教義を重合的合意の中心に収斂させて均衡に到達させるべく意図されている。ただしそれは、ハーバーマスの意図する哲学的プロジェクトではなく、道理的な形で正当化がはかられるような均衡化である。

②の点について。妥当性は公共性を与える1つの要素であるということは一応のところ容認するとしても、妥当性自体も市民の討議によって確保されうるようなものなのか。原初状態にいる自由かつ平等で合理的な人格は、デモクラシー体制における道理性的な公共的価値を負荷されており、それは観察者であるロールズが設定する条件である⁽¹⁴⁾。原初状態の人格は、自由かつ平等で合理的で道理性的な存在者なのだが、それは、公共的たる公正な価値として、すなわち、デモクラシー社会における「自由で平等な市民」の「代表者」として規定されている。つまり理論家であるロールズが仮定・前提としている条件である。

ハーバーマスは、そのようなロールズの仮定を「不偏的な判断」の視点とよび、批判する(RT:88)。仮定すること自体は確かにロールズ自身の仕事であって討議に付されてはいないが、仮定条件の内容自体は共有化されたデモクラシー社会における市民の属性である。この仮定の属性が間違っていると言うのなら代替案を提出すれば良いが、ハーバーマスは依然ロールズのメタ方法論にばかり非難の矢を向けている。理論の前提は市民の間で道理性をもつとしてロールズが規定している⁽¹⁵⁾のだから、方法論で攻めても仕方がない。

カント的モノローグの方法は、討議という契機を欠いているために認めがたく、また諸教義や善の内容の内在的論理から導出された「重合的合意」と、所与の公共的政治的構想との偶然の一致に委ねる政治的自由主義の方法では、政治的形成としては貧困であるとして、ハーバーマスは容認しない。が、ロールズは「RH」において多元性が立憲民主主義体制の重要な特徴であるとした上で、妥当性の観点からあらゆる包括的教義を批判するハーバーマスの方法論は、1つの包括的教義であって、独立的な政治的構想を目指し政治的に道理的である限り諸教義を容認する「政治的自由主義」とは異なると主張する(RH:510-511)。近代の立憲民主主義のなかに沈殿している共有化された公共的政治的構想は、多元的な価値から正当化されるものではないが、かかる善や価値の多元性を保証する。よってかかるロールズの構想は、包括的教義ではなく独立の不偏的ないし普遍的な最高位の「政治的価値」を體現していると規定しても過言ではない。ハーバーマスの「妥当性」根拠に基づく善や価値への「問い」(おそらく善や価値の内容の変質を迫るはずである)は、政治的自由主義が目論む中立性と多元性を侵食し、思うに論理的要請としては一元的な構想となる。

5. 政治的構想の正当化手順

ハーバーマスのロールズ解釈によれば、まず政治的構想の正当化の第1段階は、「私の観点から」現れる全てものを捨象して、「普遍化可能性テスト」にかけられて全ての人の利益になるような原理、実践、制度等が選択される。つまりこれは、無知のヴェールが布置される公正な「原初状態の段階」である。第2段階になると、無知のヴェールが少しづつ引き上げられて、情報が徐々に入って来る。原理等の「適用」段階であり、この段階でのテストは、自己の包括的教義に特有の先入見に条件付けられている。最後の段階は「広いかつ一般的な反照的均衡」の段階であり、ここでようやく他の市民を我々は考慮に入れて、政治的構想を支える道理的な包括的教義を持っている市民として、お互いをみなす関係になる。ところがハーバーマスは、ロールズの規定する最終段階においても、いまだに「自己中心的な」egocentric普遍化可能性手続きのままであると指摘する(RT:90)⁽¹⁶⁾。

そこでこの段階を脱して「普遍的な受容」と合致する政治的構想を手に入れるには、市民自身の視点からなされなければならない、その視点とは「相互観察」の視点であり、その視点を通して市民は、合意が起きているかどうかを確立するとハーバーマスは言う。つまり「合意とは起こっている出来事である」(RT:90)。換言すれば、ロールズが言う最終段階までは、市民の構想はモノローグの主観的に正当化してきた構想だが、ハーバーマスの規定する＜本当の最終段階＞では、市民自らが参加者として関与してきた構想の正当化プロセスから一歩下がって自分たちの作業を対象化する観察者の視点を市民が取ったときにはじめて、構想の公共的正当化が起こるのであり、現に起こっていることをも確認できる

のだということである。客観化されたかかる観察者の視点を、ロールズの「RH」から引用して、「それ（共有化された政治的構想）を彼らのいくつかの包括的教義に埋め込む」（RH:517）作業として把握している（RT:91）。ただしハーバーマスは、ロールズが使う「共有化された」というタームは誤解を生むとして批判する。重合的合意とは、「同時の決定」によって、「他の全ての人々」が「同一の構想」を確立する時⁽¹⁷⁾に生まれるものなのであるから、そもそも「共有化」という概念を使うことはおかしいと述べる（RT:91）。

さて、ハーバーマスの批判が妥当かを検討してみよう。まずロールズの3段階すべてが不偏的な視点を欠いているという批判についてである。しかしロールズの「RH」における記述を、ハーバーマスは見落としている。「…自由で平等な市民は、道理的で合理的な市民を表象する条件のもとで、これら政治的諸原理にかんする合意を実現する市民としてみなされている。…我々は、一般性の異なる水準で、それ（同意された原理が道理的であるかどうかということ）を、我々の熟慮を経た判断considered judgementsの支点とつき合わせて、チェックする。我々はまた、これらの諸原理がいかにうまくデモクラシー制度に適用されうるか、またその結果がどうなるのかを検討しなければならないし、それゆえ正当な反省に基づく我々の熟慮された判断と、実際にどれほどよく一致するかを確かめなくてはならないのだ。いずれの方向においても、我々は自分の判断の改定を迫られる可能性があるのだ」（RH:514）。そもそもロールズの反照的均衡の方法とは、かかる原理と熟慮の往復作業による一致点（支点）を見つけることであり、デモクラシー社会の「人格の構想」（自由で平等かつ合理的）を所与として引きうけた上で導出される「原理」と、現実のデモクラシー社会にいる市民の「熟慮」との対話である。ロールズは、この熟慮の修正を、人格の能力の1つであり、公的な自律性としての能力である「正義の感覚」に基づくものであると考え、それを道理的なものであると規定している。ロールズが言うように、一般性のレベルはさまざまな領域によって異なるのであり、ハーバーマスにおいてさえ、一般性のレベルを5つのカテゴリーに分類してはいたはずである⁽¹⁸⁾。ロールズは、上にも述べた如く観察者・市民・原初状態の人格としての代表者の3者に分け、それぞれの水準に分けて論じている。そして3者相互の間の反照を意図している⁽¹⁹⁾。したがってロールズにおける反照的均衡作業の第3段階においては不偏的観察者の立場をとっていないとは言えないのであり、ハーバーマスの主張はややミスリードである。

ハーバーマスは、政治的意見にかんする3種類の「不一致」を区別する。（a）政治的事柄の領域についての定義、（b）政治的価値のランク付けと道理的なバランス、そして（c）非政治的価値に対する政治的価値の優先、の3つ。そして（c）が一番重要のことである（RH:91）⁽²⁰⁾。そこで（a）と（b）については註に落とすことにして、（c）善・教義の価値と政治的価値とを峻別するラインを確定することについての不一致を見てみよう。ハーバーマスのロールズ批判は以下の通りである。「ロールズの前提において、公共的理性が市民に制約を課すことができるのは、政治にかんする基礎的な事柄についての合意が、既に達成されている場合に限られる」（RT:92 傍点執筆）。そして政治的価値が偉大なものであって、最終的には政治的価値が非政治的価値に優先する事が市民に認識されるはずだという「希望」をロールズは述べているにすぎないと、ハーバーマスは批判する。ロールズはあまりに所与の公共的な政治的価値を超越的なものとしてしまい、それは願望の域を出ずに非現実的である、とハーバーマスは言いたいのである。諸教義の内在

的論理に依存しない形で正当化されるという超越的見解は、その点では「認識論的権威」に基づくものだ、とハーバーマスは言う (RT:93)。つまりロールズは「カント的不偏性」にあくまで固執している、という見解である⁽²¹⁾。

6. 哲学者と市民のコミットメント

まずハーバーマスは、ロールズ理論において、政治的構想には道理性、対して包括的教義には真理性のそれぞれが位置付けられていると規定した上で、政治的構想の「妥当性」という別の概念を持ちこんで、包括的教義が道理的である場合に限り、異なる包括的教義が材料となって、その妥当性を生むと言うのである。そして「道理的としてみなされるべきものは、基本的な政治的合意の創発に先立って、既に作用している不偏性という基準によって決定されなければならない」(RT:94)と述べる。しかし、これを押し進めることで多元性が無視されてしまいかねないのでロールズは「RT」で反省しているとして、ロールズの記述をハーバーマスは引用している。

そこで多元性の事実を射程に入れつつ、と同時に不偏性によって規定される道理性を組み込んだ形で正義の構想を正当化する場合、不偏性の立場に立つ「哲学者」と道理性の立場に立つ「市民」の間を媒介するものは一体何なのか。ハーバーマスは、ロールズの記述を引用して、ロールズ理論においては最終的な正当化をなす主体は市民であるとし、哲学者の仕事が「市民の政治的意志形成」を害してはならず、市民の視点に立って政治的構想を目論まなければならないと述べる (RT:95)。しかしかかるロールズの主張は、妥当なのであろうか。市民の視点に収斂されてしまうなら哲学者の仕事は必要ない。反照的均衡は、観察者の視点をも含んだ熟慮と原理の一致点ではなかったのか。それでも観察者という概念の中には哲学者は入らないのか。ロールズの記述を見る限り、この点ははっきりしない。この意味で、むしろハーバーマスの見解の方が妥当性をもつ。「ポスト形而上学的権威は一度、包括的教義から独立して、内容よりもむしろ過程に具体化される実践理性にまで回復されると、それ自身干渉主義的な役割を果たすことができなくなる」(RT:95)と述べる。

つまりハーバーマスによれば、観察者の不偏的視点を手続きに限定することで、正義の政治的構想は、包括的教義に対して超越的ではあるが変質を迫るような干渉主義的影響を与えるような存在にはならないというのである。もはやこの視点は、ハーバーマスに言わせれば、「参加者の視点」ではなく「不偏的な視点」である。ハーバーマスは、初期の批判から一貫して手続き主義を採用するので、かかるロジックはきわめて納得がいく。これならロールズが主張する「中立性」は確保できそうである。ところが上でも見た通り、事態はそう簡単にはうまくいかない。ハーバーマスの場合は、包括的教義もこの不偏的な視点によって批判にさらされていくからであり、非干渉主義からは程遠い。ともあれこの手続きを、「討議の条件」や「推論的な過程の形式的特徴」とし、かかる手続きが揃えば、参加者は不偏的な立場をとらざるをえないとハーバーマスは主張するのである (RT:95)。

では、ハーバーマスの「手続き主義的」な討議の場合における哲学者のスタンスは、一体いかなるものなのか。ハーバーマスの答えは簡単である。①正義の構想についての一応のpro tanto正当化、②その構想を、デモクラシー社会での「実際に」「広く」共有化された規範的な「背景的直観」background intuitionsに照らし合わせてテストする、と言うのである。①について。哲学者は「客観性」や、実践＝道徳的内容を持った「合理性」の立場

に立ち、包括的教義から独立して、正義の構想を正当化するが、しかしこの哲学者の超越的とも言える構想が受け入れられるためには、この構想が「理解」されなければならない(RT:96)。次に②について。反照的均衡の方法は、哲学者に、間主観的に共有化された背景的知識を、参照させる。この参照の仕方は二通りあると言う。第1に哲学者は、市民社会に既に作用している「哲学自体の視点」を合理的な政治的構想の基準によって「発見」「判断」すること。第2に哲学者は、「確立された確信」を「受け取る」acceptこと(RT:97)。

第1の方法を、哲学的視点を発見する「分析方法」と規定すれば、第2の方法は、単なる「記述方法」と言うことができる。ハーバーマスは、かかる反照作業の中でロールズが意図する反照的均衡が達成され、哲学者による「客観性」と「不偏性」の視点による政治的構想の正当化がはかれるというわけだ。つまりハーバーマスの場合の哲学者は、市民の立場として政治的構想の「形成」に参画するわけではなく、あくまで不偏的な立場に立ち、記述と分析を行うことに限定され、市民が正当化の最終段階で引きうける立場である。ところがロールズの場合は、その逆で、哲学者が市民として「参加」するというロジックである。かかる2人の対称性は、結局哲学者における不偏性の確保の仕方にかんする認識の差異に由来しているのである⁽²²⁾。

7. むすびにかえて

ハーバーマスの「討議的＝哲学的リベラリズム」は、「内在的＝哲学的リベラリズム」とは異なり、市民が哲学者たる不偏的で厳格な立場をとることの重要性を論じ、ロールズの市民社会の共有化された道理性に対して一定のスタンスを取っている。かかる道理性の根拠となる重合的合意は、現実的視点を取り入れて、原初状態から導出される原理を、緩やかな形で承認する装置である。ハーバーマスの議論には厳格思想としての多くの難点が存在する。ハーバーマスは、ロールズの「政治的リベラリズム」の構想が「内在的＝哲学的リベラリズム」的であると批判し、あたかもこの両リベラリズムには差異がないかのように論じているのだが、かかるハーバーマスの批判は、ロールズの重合的合意の基礎たる「道理性」(善に優先する正)を見落としているがゆえに妥当性を欠くものであることが検証された。ゆえに本稿の考察によって、「内在的」、「政治的」そして「討議的」リベラリズムはそれぞれ明確に峻別されなければならないことは言うまでもなく、今後の「リベラリズム論争」における視点の拡大に資することを期待する次第である。

註

- (1) かかる不偏性概念の違いを明確にし議論をクリアーにするため、本稿全体を通じて分析される3種のリベラリズム構想の「類型」を以下に示しておく。各視点について、(内在的＝哲学的リベラリズム、政治的リベラリズム、討議的＝哲学的リベラリズム)の順に、類型化してある。正当化の根拠→(哲学や価値や教義、デモクラシー体制の共有価値、哲学)、根拠の性質→(包括的不偏性、道理的不偏(普遍)性、妥当性をもつ普遍性)、構想正当化の方法→(単なる内在的な重合的合意、立憲主義に適う重合的合意、討議による哲学的真理への一致)、諸価値の様態→(多元性、多元性、一元性)、諸価値間の関係→(政治的構想においては寛容・文化においては共存と対立?、寛容に基礎をおく共存、寛容というよりも中立で最終的に収斂化)、政治と諸価値の関係→(中立、中立、一致)、構想正当化の主体→(哲学者、市民、哲学者)、所与の公共文化→(一応認める、認める、討議の対象)。

- (2) 政治的リベラリズムと哲学的リベラリズムとの論争については、井上 (1999:117-119)。井上は、ロールズの中立的構想自体が、哲学的に問題化され論争化されることによってのみ擁護できるのであり、哲学的教義や善に依拠しないロールズの=政治的リベラリズムは、『正義論』からの後退として、哲学的リベラリズムへの回帰を提唱しているが、ハーバーマスの討議的な哲学化へは批判的である (井上1999:220)。
- (3) ロールズが、政治的構想の根拠とするアメリカ合衆国の政治文化が、本当にどこまで共有化されているのかについての批判的・懐疑的な主張は、井上 (1999:120)。ハーバーマスも、ロールズの前提とするかかるとアメリカ的公共価値については懐疑的であるため、その点は井上と同じである。
- (4) ハーバーマスによる再批判論文「RT」は全部で7節から構成されているが、本稿においては検討において5つのテーマに再構成をし、ロールズの反論および他の著作からの記述を適宜参照・確認することによって、上の諸点につき回答を与えようと思う。
- (5) ホブズの契約論は、道徳的理性を「合理的動機」とみなして、道徳的判断を合理的選択に還元する。つまり実践性というものを、主観的な願望や選好の観点に基づく道具的合理性のレベルにおいて把握し、それによって合意の手続きたる社会契約の正当性を主張したのがホブズであった。しかし、かかる戦略は、拘束的な規範や妥当な道徳的言明の義務的な力を見落としていると述べる。道徳的言明の認知的内容は、かかる道具的合理性ではなく、実践理性の別の構想にあるのだ、と述べる (RT:80)。そこでハーバーマスは、実践理性についてアプローチを2つに分類する。①道徳的言明の認知論的内容を、何らかの形で保持する実践理性の観念を発展させる、②道徳的構想の真理性を基礎付ける「強い」伝統と包括的教義に依拠する、この2つである (RT:80)。彼によると、①のアプローチでは、実践理性の認知論的な力は失わない形で実践理性と理論理性とを明確に区別しなければならない (RT:80-81)。対して②のアプローチでは、様々な包括的教義のうち1つだけが真であると考えているような、共同体の信者たちの持つ世界観の還元不能な多元性pluralityに対処しなければならない、と述べる (RT:81)。
- (6) こうした討議による実践性をハーバーマスは、さまざまなタームで言い換えている。ざっとあげれば、道徳的正当化における価値の一般化、一般化テスト、議論の認識論的位置、実践的熟慮、議論のプラグマティック理論、真理性と正当化の意味論的・プラグマティック的構想にかんする討論、等々 (RT:82)。
- (7) Rawls (1999:408) を参照。「善の構想」と「正義感覚」の2つの能力。
- (8) 「重合的合意」はoverlapping consensusの訳であり、諸教義・善等が重なり合う時に成立する合意のことである。
- (9) ここで、注意しておきたいことがある。上の記述の「重合的合意」という部分である。ロールズの原文では「公共的正当化が起こるのはPublic justification happens…」 (RH:517) となっている。それにもかかわらずハーバーマスは、それを「重合的合意」と書き換えて、そこには引用符をせずにロールズの記述におけるwhen節以下の文と接合している。ロールズによれば、重合的合意は公共的正当化の装置であるから、上のように置換えたとしてもさほど問題はないが、重合的合意が現に行われて即公共的正当化が実現されるわけではなく、ロールズにおいては、「共有化」された政治的構想 (原初状態の人格構想を含め) を教義のなかに取り込む (教義自身にとっては血の滲むような埋め込みであるに違いない) ことによって、ようやく達成可能となる、という論理構造であるからして、注意されたい。
- (10) ハーバーマスは、その非公共的理由をいろいろなタームで言い換えている。「一人称の観点」、「別様に動機付けられた非公共的理由」そして「異なった見地に根ざした前提」である。
- (11) 「道理性は合理性に優先し、このことは正rightの優先を与える。…自由で平等な人格の代表としての当事者の意図を特徴付けるような道徳的な状況を条件として、公正としての正義は合理的選択の説明を使用する、ということである」 (Rawls 1999b:401n)。
- (12) 「…理想的過程では、無知のヴェールveil of ignoranceは立法者がすでに不偏であるということを示している。討論は、情報を結合し、かつ議論の範囲を拡大する方法である。少なくとも時の経過

においては、共同審議の効果が事態を改善することは確実であるように思われるのだ」(Rawls 1999a:315)。

- (13) ノーマン・ダニエルズによる「狭い均衡」と「広い均衡」の図解分析は、川本 (1998:182-193)。
- (14) 原初状態にいる仮定の当事者／デモクラシー社会にいる市民 (ハーバーマス流に言えば「本当の血肉」をもった市民 (Habermas 1995:128))／観察者 (理論家) の3者の立場を明確にロールズは峻別している (Rawls 1999b:341)。
- (15) ロールズの反照的均衡における、契約当事者の視点と理論家 (ロールズ) の視点との区別を怠ることに、警鐘を鳴らすのは、渡辺 (1998:176)。正義の構想なり原理なりを演繹するのは、契約当事者であり、我々理論家のなすべきことではなく、われわれができることは、かかる原理を演繹する舞台装置 (人格や無知のヴェールなど) の記述変更だけであり、これがメタ倫理的視点であると、渡辺は指摘 (1998:177)。
- (16) その理由をはっきりと述べられてはいないが次のような記述から推測的判断が可能である。つまり「手続きの循環的 (再帰的) recursiveな適用のみが、期待される結果を生み出すことができる」(RT:90 傍点執筆者)。敷衍すれば、最終段階においてはまだ反照作業において相互の市民による再帰的「討議」ではなく、モノローグ的¹反照的考慮の段階だから、手続きがエゴセントリックなのだ、とハーバーマスは言いたいようだ。3種類の正当化は不偏的な判断を欠いているとも述べている (RT:91)。
- (17) 合意の同時的決定性については、ホップズの如くである。パウチャ＝ケリー (1999:訳53) 参照。
- (18) ハーバーマスは、理論的・実践的・審美的・治療的・説明的討議に分類し、実践においては正当性の妥当要求に基準をもとめる。ハーバーマス(1985:訳48)参照。
- (19) 3者の区別の重要性、3者の三角形による反照については、渡辺 (1999:43)。
- (20) (a) と (b) については簡単に触れられている (RT:91-92)。(a) は国家と教会との境界といった領域にかんする設定問題。(b) は政治的参加 といった積極的権利 (自由) と消極的自由とのバランス問題。ハーバーマスによれば、かかる問題にかんする意見の相違は、重合的合意自身を掘り崩すかもしれないから、そのような問題についても「合意的な方法」で、解決されうると主張 (RT:92)。さらに「他人による拒否によって我々は、我々が当初提起した正義の構想が、まだ十分に分散化されていなかったことを認識する」と述べ、「現在受け入れられている立憲的原理を改定する」(RT:92) 必要性があれば、そうすべきとも言う。ただし話し合いは良いが、正義の構想が十分に分散化されていなかった、すなわち正義の構想が市民の善や教義に埋めこまれていなかったということが、正義の構想が誤っているとして改定しなければならないということを帰結するわけではない。むしろ、ハーバーマスが良しとする討議が不足していただけの事で、ロールズ流に言えば、反照的均衡における熟慮が足りなかっただけである。
- (21) ただしこのロールズの超越的見解は、ハーバーマスの哲学的プロジェクトとは異なり、正当化の前提としている政治的価値の内容についての正当性、すなわち所与の公共的政治的構想の正当性については問わないという意味で、必ずしも哲学的リベラリズムとはいえないことに注意。
- (22) 例えば、今田 (1995:11)。自然科学とは異なり社会科学の認識論においては、観察者たる社会科学者の不偏的観察が行為者に影響を与え、その影響による行為者の行為における変化が、さらに観察者にはねかえって観察自体の修正を迫るというフィードバック効果が認められるとの見解はきわめて一般的である。かかる知見に基づく場合、ハーバーマスの立場もロールズの立場も、限定的であらざるをえない。反照的均衡においてはさまざまな立場の交換を想定したほうが理論の柔軟性を確保することができる。

文献

- Boucher D.=Kelly P. 1994 *The Social Contract from Hobbes to Rawls* Routledge 飯島他訳 『社会契約論の系譜』 ナカニシヤ出版 1997
- Habermas J. 1981 *Theorie des Kommunikativen Handelns* Surkamp Verlag 河上他訳 『コミュニケーション

ヨンの行為の理論（上）』 未来社 1985

Habermas J. 1998 *Inclusion of the Other-Studies in Political Theory* The MIT press RTと略

Habermas J. 1995 Reconciliation through the public use of reason : remarks on John Rawls' political liberalism *The Journal of Philosophy* volume92 No.3 109-131

今田高俊 1995 『自己組織性』 創文社

井上達夫 1999 『他者への自由』 創文社

板橋亮平 2002 「ロールズ－ハーバーマス初期論争の分析と意義 公共哲学の発展へ向けて」『現代社会理論研究』 人間の科学社 79-88

川本隆史 1998 『ロールズ』 講談社

Rawls J. 1993 *Political Liberalism*, Columbia University Press PLと略

Rawls J. 1999a *Theory of Justice* Harvard University

Rawls J. 1999b *Collected Papers* Harvard University Press

Rawls J. 1995 Reply to Habermas *The Journal of Philosophy* volume92 No.3 (B.N.Ray ed, *John Rawls and the Agenda of Social Justice*, Anamika Publishers&Distributors 2000所収 508-558) RHと略

渡辺幹雄 1998 『ロールズ正義論の行方』 春秋社

渡辺幹雄 1999 『リチャード・ローティ ポストモダンの魔術師』 春秋社

(中央大学経済研究所・準研究員)